



目次

貴重書紹介『書言字考節用集』 p. 1, 4
 うつれば変わる：茶屋からベーカリーへ 塩田一善 p. 2-3
 図書館からのお知らせ p. 4

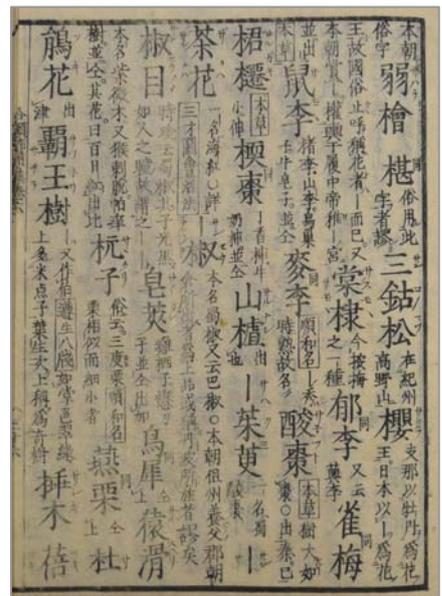
書言字考節用集

乾坤上より数量附日本姓氏まで10巻を13冊に装丁。縹色地に卍繋ぎ・瑞雲の艶刷り文様表紙（縦22.5、横15.3糎）の左肩に楮紙題簽（縦17.3、横3.5糎）を押す。原装・原題簽ではあるが、表紙文様は薄れて判然としがたい。第1冊題簽が破損しているので第2冊分を示すと、子持ち枠中に「増補／和漢合類大節用集^{乾坤時} 式」の如く刷る。

每半葉四周单边序7行、本文8行（本文匡郭縦16.0、横11.5糎）。匡郭外上部にイロハ順の篇目を記し、单边で囲む。本文は大字にて項目を掲げ、細字夾注形式の説明を加える。版心「合類節用集卷一（～十）○（丁数）」。
 最終冊末尾に「山崎闇斎先生門人編集略目録」1丁、そこに「御書物所 京都三条通堺町 出雲寺松栢堂」の名が見えるけれども刊記はない。

序文末に「元禄歳次戊寅南呂階莫五葉、東武城隅賤士榎島昭武謹題」とあり、元禄11年（1698）8月の成立を語る。さらに「京師戊子之火」のために書目や甲子異称等を失ったと刻するので、宝永5年（戊子、1708）3月8日の京都大火によって若干を失ったことになる。諸本の刊記を比較すると享保2年（1717）が初出らしく、元禄11年完成→宝永5年一部分焼失→享保2年刊行の経緯をたどった。初出から幕末までに8種以上の版を重ね、しかも同一版本を用いての刷り増しばかりではなく、すべての版を彫り直したものもあって、その人気ぶりが伺える。掲出本は万延元年（1860）版のやや後印と思われるが、出雲寺松栢堂を版元とする伝本は他に知られていないようである。なお、イロハ順に書かれた自筆稿本9冊が伝わる（天理図書館蔵）。

さて古辞書の枠組みをごく粗く言うならば、表記それ自体の持つ形式的側面（字形・読



（図版 卷六「霸王樹」の項）

（4 ページに続く）

うつれば変わる：茶屋からベーカリーへ

エスプラン店主 塩田 一善

竜骨木・仙人掌・霸王樹、さてこれはなんでしょう。どれもサボテンと読みます。南北アメリカ大陸を中心に、世界中では2000種以上もあるサボテンは、いかにも外来語のような面構えの言葉ですが、さてどこの国から渡来したかとなるとあやふやらしく、日本語「三布袋」(さんほてい)の訛りと考える人さえあるようです(英語ではcactus)。ポルトガル語のsabaóと日本語「手」の合成説が有力、と辞書にはありました。

漢字で書いて最も見栄えのするのは、霸王樹です。我が国に持ち込まれたのは江戸時代の初め、『書言字考節用集』や『和漢三才図会』にも出てきますけれど、この書き方は貝原益軒(1630～1714)の『和爾雅』(元禄元年)が一番早そうです。北緯56度、と言えは樺太(サハリン)よりも北での自生例があるように、サボテンは生命力の強い植物。しかし、セイタカアワダチソウやブタクサのようにやたらと繁茂して、ありふれた植物になってしまうことはありませんから、もし人の背丈を遙かに超えるサボテンがあったならば、今日でも注目されるでしょうし、まして江戸時代なら、大いに評判となったでしょう。

旧東海道、それはJR京浜東北線やや南を通り、松並木沿いに民家が点在し、現在よりもっと近くにあった海から波の音も聞こえてきたはずです。今の横浜は、安政6年(1859)6月の開港に始まり巨大化した都市で、以前は神奈川宿の一部に過ぎない寒村でした。昼でも狐が出ると言われたほどさびしく、川崎の宿を出た旅人は、鶴見で休憩して次の神奈川をめざし、さらに保土ヶ谷へと向かったものです。その鶴見に巨大なサボテンがあり、一息入れる往来の人々を驚かせていました。弘化2年(1845)正月17日、吟味役森七三郎は『江ノ島参詣之記』に「饅頭名物、サボテン茶屋あり・・・其の高さ一丈余」と書いていて、5株あったことが知られます(鶴見区史)。ちなみに「饅頭名物」は、米(よね)饅頭のことです。

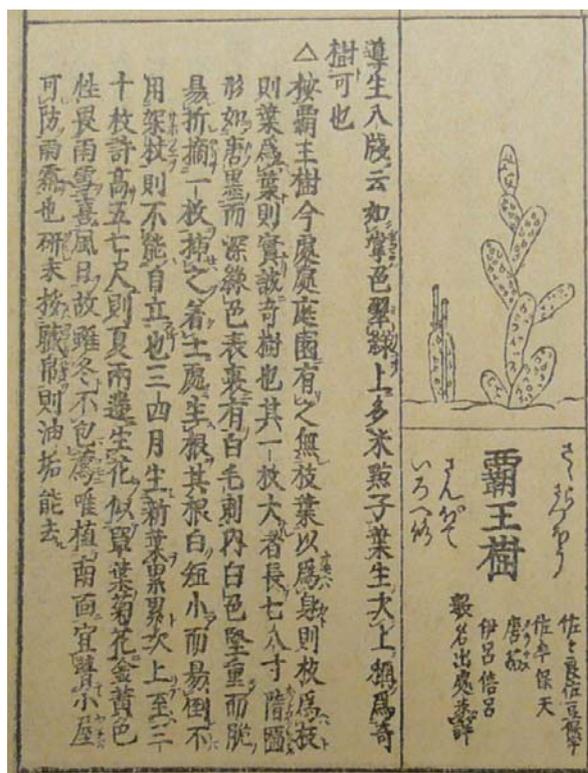
このサボテン、江戸の話なのでもっともらしく霸王樹と書くことにしますが、寛政のころ(1789～)より茶屋の家族に手厚く保護され、年ごとに芽を出し花を咲かせ、根本太く高さ4尺(約1.2メートル)にまで成長していました。もちろん寒さを嫌いますから、冬は霜除け雪除けを設け、春の彼岸に覆いを取り除くのが例でありました。茶屋を始めた人物は作兵衛と言い、三代将軍徳川家光の時代、現在の鶴見銀座商店街あたりに所帯を持ったと伝えられていますから、幕末の街道筋で霸王樹が評判となるまで、茶屋には江戸幕府とほぼ同じ歴史があるわけです。五雲亭貞秀の『御開港横浜之全図』は、横幅2メートル近い超大作ですが、左下に「さぼてん茶屋」の名が見えます。その先に「朝田町」と書かれていますが、これは「潮田町」の誤刻でしょう。

下って文政のころ（1818）の茶屋の主、五代目作兵衛は九州を旅し、木の枝を支えとして伸び上がる霸王樹を目にします。鶴見へ帰った作兵衛は、九州の例を参考に力杖や添え木を工夫し、ついに高さ1丈3尺（約4メートル）、根まわり6尺（約1.8メートル）の見事な霸王樹に育て上げました。東海道を旅する人々は、誰もが足を止めて見物し、買い求めたいと申し出る者もあったと聞いております。

なお、『新編武蔵国風土記稿』巻66（橘樹郡9）によると代々名主を勤め、元龜天正（1570～1592）の小田原北条氏発給文書を伝え、茶屋の先祖をたどれば北条義時の三男陸奥左近太夫重時に発し、その次男武蔵守時茂を祖としています。太田亮氏『日本国誌資料叢書 武蔵』（第3章）にも同様の記事があり、『新編武蔵国風土記稿』の孫引きでしょう。武蔵守時茂は塩田の姓を名乗り、家伝では信濃国の塩田平や塩田城もそのゆかりと言います。鎌倉幕府滅亡と共に武士身分から離れ、南北朝・戦国の世を経て寛文元年（1661）亡くなった初代以来、鶴見の地に腰を据えました。

さて、お店の看板であった霸王樹と、街道筋の茶屋はどうなったのでしょうか。まず霸王樹について言いますと、明治維新あたりから樹勢に衰えが目立ち、家人の手厚い世話により一旦は盛り返しましたが、明治44年（1911）の鶴見大火で惜しくも焼失してしまいました。茶屋のほうは戦後ベーカリーとなり、「エスプラン」の屋号で現在営業しております。店先に「霸王樹茶屋」の碑が建てられていますので、ご覧になった方があるかもしれません。波の音が聞こえた東海道の宿場町から、本山と大学のまちへ。時代が移り、商売も変わりましたが、江戸以来300年以上、ずっと同じ場所に住み続けています。そして私が、十一代目のあるじです。

（しおだ かずよし）



（倭漢三才圖會 卷八十八 「霸王樹」の項）

(1 ページより続く)

み方)に従い配列するものと、まず言葉の意味で分類するものとに大別されよう。中世の辞書を例にとると、イロハ順の『節用集』類が前者の代表であり、『下学集』は後者に属する。ちなみに『下学集』については、かつて文庫本の形で出版されたことがあり(亀井孝編)、その解題は小品ながら秀抜無類と言えよう。現在品切れとなっているのは、いかにも惜しい。

掲出本は「節用集」の名を含んでいて、確かにイロハ順が構成原理のひとつではある。しかし、それより前に語義の内容分類を行っていること、すなわちまず意味(第一乾坤〜第十数量附日本姓氏の10部門)で分け、次にイロハ配列を施しているところに、大きな形態上の特徴がある。先にふれた自筆稿本は興味深いことに純然たるイロハ順、中世以来の『節用集』の伝統に即した形であり、享保2年の出版までに大幅な改編を受けたわけだが、その詳細は不明。撰者榎島昭武(マキシマアキタケまたはマキノシマテルタケ)、本姓源、通称彦八は膳所藩本多家に仕え有職に詳しく、著述中では『方丈記流水抄』と本書がよく知られている。

『書言字考節用集』はおもしろい辞書である。たとえば巻六「霸王樹」の左に「サチラ」、右に「サツホウ」と振り仮名が見え、いずれも珍しい読み方であろうし、出典に「日本紀・万葉・源氏・八雲抄(八雲御抄)・著聞集・白文集(白氏文集)」等の文学資料が相当採用されていることも、注意される。関心のある方は『書言字考節用集 研究並びに索引』(中田祝夫・小林祥次郎)が備わるので、就いて見られたい。この大著、勿論労作であるが、いくつか気になることもないではない。ひとつだけ言うと、巻四人倫門第30丁の丁付を「三十四十」とすることについて、「十丁もとばしてしまった誤り」と解説するのは穏当ではない。近世資料を扱ったことのある人ならばよくご存じの「飛び丁」である。具体的に示すと、第30丁前後の丁付は「二十九・三十四十・四十一」となっており、「三十四十」は「とばしてしまった誤り」ではなく、大部の書物と見せかけるために意図的に行われた水増しと見るべきである。版本の辞書類にその例少なからぬであろう。

図書館からのお知らせ 第20回企画展のお知らせと最近の企画展について

「第20回企画展 鶴見大学図書館食堂」が12月10日より開催されています。“食”に関する本をいろいろな分野からピックアップして展示しています。食文化や食育、栄養学に関するもの、レシピ本まで、様々です。

企画展は、図書館資料の紹介の他に、貴重書展の開催されていない期間の展示スペースの有効活用や、蔵書構築への貢献、貸出冊数の増進など、様々な役割を担っています。最近では、教員や学生(学習アドバイザー)の協力を得て、図書館外の力との連携を広げる取り組みを行いました。

貴重書展の合間に行うということで始まった企画展ですが、今回は1月16日から始まる貴重書展の開催中も続けて展示することにしました。

アゴラー鶴見大学図書館報一 第128号 2008年1月10日発行

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197

鶴見大学図書館ホームページ <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>

(2008/01/22)